



## 「ホットでクールな海洋資源の話」

### 〈燃える水〉

最近何かと話題にのぼる、「燃える水」メタンハイドレート。白い氷がメラメラと燃える不思議な映像を、ニュースや報道番組で目にしたことのある方も少なくないと思います。

見た目はそっくりでも、メタンハイドレートは単なる水ではありません。中には大量のメタンが閉じ込められています。角砂糖ひとつ分の大きさの水が融けるとティースプーン一杯ほどの水になります。同じ大きさのメタンハイドレートが融けると、ひとさじの水と、角砂糖160個分の体積のメタンガスができるのです。都市ガスや発電所の燃料として活用されている、天然ガスの主成分でもあるメタンガスは、石油炭炭

に比べクリーンなエネルギー源として注目されています。

近海の深海底に存在が確認され、日本の未来を担うエネルギー資源としての期待が高まるメタンハイドレート。深海底から採集し実用化するための、さらなる技術開発が進められています。今年2月から渥美沖にて海洋産出試験の準備が始まっており、来春には実用化に向けたデータ収集が行われる予定です。

### 〈深海底はニュー・フロンティア〉

深海には、ほかにもさまざまな宝物が眠っています。レアメタルを含むマンガノジュールは、「燃える水」とは対照的に、真っ黒でまんまるな重い塊。また、海底から噴き出す熱水の周辺には、金属鉱床が成長しているところもあります。

現在開催中の夏の企画展では、メタンハイドレートを中心に、海洋底資源についてご紹介していきます。節電の夏、日本のエネルギーと資源の未来について、一緒に考えてみませんか？

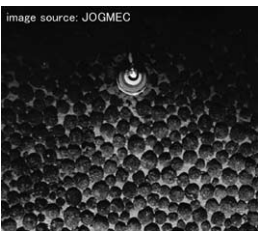


image source: JOGMEC  
深海底を埋めつくすメタンハイドレートを写す写真(提供: 独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構JOGMEC)。



## ドラマには出てくるかな？ 藤原俊成と平忠度

鎌倉時代に編さんされた歴史書『吾妻鏡』には、藤原俊成が開発した竹谷・蒲形荘についての記述が出てきます。俊成から熊野社に寄進された領地は、熊野別当の湛快(たんかい)からその娘へ、娘から最初の夫、行快(熊野別当)へ、次いで娘の再婚相手の平忠度(清盛の異母弟、薩摩守)へと譲られました。しかし平家が朝廷の敵となつて敗れ、領地を没収されてしまいました。湛快の娘は元の夫である行快に頼み、いずれは自分と行快との間の子に譲るという条件で協力を得て、領地を返してもらえました。

平忠度は、歌人としても優れた人で、藤原俊成から和歌を学んでいました。寿永2年(1183)平氏一門が木曾の源義仲に追われ、京都から離れて落ちのびていく折、忠度は藤原俊成の屋敷に立ち寄り、自分で詠んだ歌を書いた巻物を師に託しました。後年、俊成はその中から一首を選び『千載和歌集』に「よみびとしらず」として載せています。



歴史展示室には、藤原俊成や、熊野と源平勢力関係の説明パネルもあります。